



迷走いつ? どこに?

京都スタジアム予定地変更提言



「アユモトキの保全」スタジアム整備を早期に実現するには、予定地と隣接する亀岡駅北土地地区面整理事業地が望ましい。4月27日、3年にわたるアユモトキの保全策を議論してきた専門家が急ぎ

組合側「柔軟に対応」実現性

よ、こうした提言を決め、府と亀岡市に提出した。座長の村上興正・元京都大講師は、現在の計画では「調査に少なくともあと3年はかかる」とし、府や市が18年3月の完成をめざさず、生熊への影響がほとんどない事業地で建設すべきだ、と提案したのだ。

駅周辺、地価5倍超 コスト

府はスタジアム本体や周辺整備の費用として156億円、市は土地取得や公園整備などの費用として50億円を想定してきた。

府はスタジアム本体や周辺整備の費用として156億円、市は土地取得や公園整備などの費用として50億円を想定してきた。市はすでに建設予定地を14億円で購入している。市によると、駅に近づく土地の造成なども始まっている区画整理事業地の地価は、予定地の5〜10倍ほどで、追加負担が問題となる。府は、その分を、スタジアム本体の建設費を削ることで捻出したいと考えた。

13日の記者会見で、提案を受け入れる条件に①地元が納得する②事業費が府と市で分担する③アユモトキを保全する永続的な仕組みを作る④3点を挙げた。提案された亀岡駅北側の事業地は、東西に約1.5キロ、南北は最大で400メートル、田畑を所有してきた地権者108人が14年、亀岡

駅北土地地区面整理組合を設立。17年度末の完成を目標に、土地の基礎工事を進めている。組合によると、南北の幅が広い駅すべ東側は、売却を望む地権者が多く、大規模な開発が可能だ。事業地全体の形状からみても、スタジアムを建てる場所は「現実的には東側しかない」(市の担当者)との見方が大勢だ。

「コスト削減は十分可能」(府の担当者)と見込む。これまで地元・保津町自治会の活動に頼ってきたアユモトキの保全について、スタジアム建設を機に府や市も保全に乗り出している。府はさらに国や計画の見直しを要請してきた自然保護団体などにも保全の仕組みが入ってもらい、「永続的な仕組み」を作ろうとしている。

だが、建設地の変更には壁がある。地元・保津町自治会の塚田勇会長(78)は「町に子どもがたかさん戻ってくる」という夢がある。アユモトキが生き残っても保津町の間が絶滅してしまう」と戸惑う。過疎や高齢化が進む自治会は、駅の東側にマンションなどを誘致して問題を打開しようと、独自にまちづくりの構想を練ってきたためだ。

また、道路などのインフラ整備といったスタジアムを念頭に置いたまちづくりの計画にも影響は必ず至る。市の関係者は「予定地での公園の整備や、区画整理の組合が考えをまちづくりに遅れが出る可能性がある」と、市民や地権者への説明には時間がかかる」と頭を悩ませる。(森原香、岡本智)

まちづくり 影響を懸念

過疎・高齢化進む地元

※1 : 京都府は建設予定地の遊水機能を維持するために、建物の地下に川から氾濫した水を一時的に溜めるための水槽(ピット)を設けるとしています。記事に書かれているのは、横浜にある日産スタジアムのような、ピロティー形式と呼ばれる方式で、京都府が計画している構造とは全く異なるものです。また、京都府の建設計画の中には、地下に設けたピットに溜まった水を排水するための設備は設けられておらず、遊水機能を補完する役割を果たすことはできません。

※2 : 京都府の建設計画では、計画地周辺に集中する亀岡市の水道水源井戸の地下水脈に配慮し、杭打ち工法ではなく、べた基礎工法を採用するとしています。そのため、べた基礎を支える軟弱地盤を広範囲にわたって地盤改良を行うとしていますが、この地盤改良工法には、一般に大量のセメント成分からなる硬化剤を使用するため、発がん物質である六価クロムによる地下水汚染が懸念されます。